

〔15〕 女が踊るベジヤール『ボレロ』

1991年10月4日 東京新聞 夕刊

はじめベジヤールの『ボレロ』を見たときのこととは忘れることができない。今からほぼ四半世紀前、一九六七年の春だった。

● 陶酔と戦慄と

幕が開いて、真っ暗な舞台の中空やや高めに、白く浮かんで揺れている小さなものが何なのか、はじめはまったくわからなかった。管楽器のソロのメロディーにつれて、それは揺れつづけ、やがて照明が徐々に広がって一つの手首から上半身が現れ、大きな円形のテーブルの上で女が一人踊っているのだと分かるまでに、長い不安な時が流れた。

踊りというには、それはあまりにもうげな、あまりに心細い動きであるように思われた。飾りといえるものを何もつけていない細い体。そのゆるやかなうねりを、ときおり切り裂くような痙攣が走り、見ている私たちを陶酔に引き込みつつ戦慄させる。

女の踊りがようやく激しさを増してきた頃、舞台の周囲にぐるりと並べられた椅子に男たちが座っているのが見えてきた。みな疲れきったように頭をうなだれている。それが一人、また一人と頭を上げ、女を見つめ、立ち上がり、動き始めるのだ。男たちの虚脱したような姿態にエネルギーが充ちてくると、それはまるで獲物に魅入られた獣のように周到で残忍な影を帯びた。

女は踊りつづける。挑発するように、また恐怖するように、ますます激しく踊りつづける。両腕でわれとわが胸を抱き、耐えかねたように床を叩くと、男たちはテーブルを囲んで踊り、舞台は狂乱となった。そして最後、女が右腕を天に差し延べ、やにわ

[15] 女が踊るベジャール『ボレロ』

1991年10月4日 東京新聞 夕刊

に身を伏せると同時に、男たちもいっせいにテーブルの上に身を投げかけ、照明が消えて、すべては闇に沈んだ。激情と絶叫が劇場全体を揺るがせたかと思われる一瞬だった。

●ドンの『ボレロ』は…

その後『ボレロ』のソロは、ジョルジュ・ドンという圧倒的な迫力を持つ男性舞踊手によって踊られ、ルルーシュの『愛と哀しみのボレロ』（一九八一）という映画になるや、世界的な名声を得るにいたった。

たしかに『ボレロ』を踊るドンはすばらしい。裸の上半身が現れるともう、その彫刻のような造型美と存在感で観客をうちのめす。「異教の神」という評があるが、そのとおり、まるでスフィンクスが動き始めたようだ、見るたびに感じ入る。

しかしそれにもかかわらず、私にはあの女性ソロによる『ボレロ』がどうしても忘れられないのである。倦怠の闇から激情の爆発へと次第次第に高まる昂揚感。女性ソロと男性群舞のあいだの、あの敵対と魅惑がうらはらの緊張感。歓喜と恐怖が一体になった狂おしさ。そうしたものが、ドンの『ボレロ』ではどうしても影が薄くなってしまふのだ。かばそい女性ソロが踊ると一つ一つの確な意味があった振りが、さほど切実に感じられなくなってしまふ。早い話が、男性群舞がなくても、ドンの『ボレロ』はじゅうぶん成立するのである。

優れた舞踊作品は振付と演技があいまってできあがるものなのだが、ドンの『ボレロ』は振付が演技に押しつぶされていると言えないこともない。この作品でベジャールの名声はいわば不動のものになっ

[15] 女が踊るベジャール『ボレロ』

1991年10月4日 東京新聞 夕刊

たのだが、しかし振付家としては内心痛し痒しといったところがあるのではないかと推察していたから、ベジャールが『ボレロ』の上演を停止するという噂を耳にしたときには、それもわからないではないと私は思った。もっともその噂で一般の『ボレロ』熱はいっそう高まったから、真意はちよつと計りがた
い。

● そしてギエム

その『ボレロ』を今度はシルヴィ・ギエムが東京で踊るといふ。ギエムというのはこれまた稀有なバレリーナで、非の打ちところのない優美な肢体で非情とも思える強い踊りを見せる。彼女にかかると、伝統的なロマンティック・バレエも時にすつかり趣を変えて、たとえば『白鳥の湖』など、悪役の黒鳥オディールがあまりに凄みがあつて美しいものだから、白鳥の可憐な純情などくそくらえという、サドの『悪徳の栄え』にも似た奇妙な感動を味わつたりする。とすればギエムの『ボレロ』はどんなものか、この作品はまたまた様相を変えるにちがいない。

女性の社会進出とともに、男女の関係も以前のよ
うに固定的ではなくなつたし、男性美、女性美のあり
りようも、著しく変化した。舞踊の世界では、それ
は殊に顕著で、最近の新しい作品や舞踊家を見ると、
身体や挙動に関する常識の変化は驚くばかりである。
ベジャールの『ボレロ』は、その変化を体現しつつ、
その度ごとに新しいコンセプトを得てよみがえる傑
作だと言ふべきかもしれない。